広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第４号　2023　287－295

ウガンダでの学校設立において地域の宗教団体が担った役割

― カサンダ県の中等学校の事例に着目して ―

横　山　穂　佳

（2023年10月６日受理）

The Role of Local Religious Organizations
in the Establishment of Schools in Uganda:
A Case Study of Secondary School in Kassanda District

Honoka Yokoyama

Abstract: In Uganda, religion and education had long been inextricably linked, with education being primarily in the hands of Protestant and Catholic Christians until 1925. Gradually, the government began to take control of education, and after independence, the close relationship between education and religion was separated after the Castle Commission report in 1963. Secondary education then expanded in the 1980s, overcoming economic difficulties and political turmoil. From the perspective of institutional history, government intervention resulted in expanding secondary education, but how were schools actually established and who was responsible for this? Therefore, this paper focuses on the process of establishing a missionary secondary school in Kassanda District, Uganda, which was established in the 1980s, and aims to clarify how local religious organizations were involved in the establishment of the school. This paper first provides an overview of how school education has developed in Uganda in relation to the activities of missionaries. Next, the establishment process of the missionary A Secondary School in Kassanda District, Uganda, is described based on the School Profile, interviews with those who funded the establishment, and additional interviews conducted. Finally, some reflections are given on the role of missionary work in Ugandan education and how the connection between school and Christianity is carried over to the present day. By looking at the actual process of establishing schools, this paper reveals the contribution of community Christians to the establishment of schools and the strong connections that continue to the present day, which cannot be seen from the macro perspective of institutional history.

Key words: Uganda, Cristian religion, Establish of school, Secondary education
キーワード：ウガンダ，キリスト教，学校設立，中等教育

はじめに

東アフリカ，ひいてはアフリカの学校教育の発展を語るうえで，ヨーロッパの宣教師の布教活動は切り離せないものである。アフリカが植民地化される以前，ヨーロッパの人々は伝道，通商の目的のもとアフリカを訪れ，彼らがアフリカに近代の学校教育をもたらしたと言われている[1]。ウガンダでは，1925年まで学校教育は主に，プロテスタントとカトリックのキリスト教徒の手に委ねられており，長い間宗教と学校教育は

本論文は，査読付き論文である。

密接な関係にあった[2]。ウガンダの学校教育と宗教（宣教師の活動）の歴史については後に詳述するが，1963年のウガンダの教育改善について提唱したキャッスル（Castle）報告書を受けて，宗教と学校教育は切り離されることとなり，学校教育は政府によって管理されるようになった。その後，経済的困難や政治的混乱を乗り越え，1980年代に中等教育が急速に拡大した。こうした制度史の視座からみると，中等教育が急速に拡大し，学校数が激増したのは政府の介入によるものに思われる。しかし，実際の学校設立には，後に述べるように，政府が学校教育を管理するようになってからも，コミュニティ，そしてキリスト教徒の力が大きかったようである。

ウガンダの学校教育と宗教の関係については，Khadidja（2013）による宣教師がアフリカに到着する以前の教育の実態から，ウガンダが西洋教育をどのように受け入れてきたのか論じたものや[3]，Hanson（2010）による1880年代から1930年代にかけて設立された村落学校がどのように西洋教育に順応していったのか論じたものなどがあるが[4]，その多くが，政府が本格的に学校教育を管理し始める以前 (1940年代以前) に対してであり，政府が学校教育への介入を開始し，学校教育が急速に拡大し始めた時期（1980年代）に関するものはほとんどない。また，実際の地域での学校設立が誰によって発案され，誰の尽力のもと行われたのか言及されているものは見当たらない。

そこで小論では，中等教育が急速に拡大し始めた1980年代に設立された，ウガンダのカサンダ県に位置するミッション系の中等学校の設立過程に焦点をあて，地域の宗教団体が学校設立にどのように関与していたのかを明らかにする。はじめに宣教師の活動との関連のもと，学校教育がウガンダにおいてどのように発展してきたのか概観する。次に，カサンダ県に位置するミッション系のＡ中等学校の設立過程について，Ａ中等学校設立25周年記念誌に掲載されていた学校史や設立費用出資者へのインタビュー，筆者が追加で当時の様子を知る地域の人へ行ったインタビューをもとに述べる[5]。最後に，ウガンダの学校教育において宣教師が担った役割，現在までその影響がどう続いているのかについて，若干の考察を加える。

１．ウガンダにおける宣教師の活動と学校教育の発展

(1) ヨーロッパの宣教師の到着とキリスト教の広がり

ウガンダが属する東アフリカで初めて宣教師としての活動を始めたのはポルトガル人だった。ポルトガルは貿易や調査，キリスト教布教の目的のもと1500年から1700年まで東アフリカの海岸沿いを支配していた[6]。しかし，横柄で抑圧的な性格のため，布教活動はあまり成功せず，多くの人々を改宗させるまでに至らなかった[7]。東アフリカでの布教活動が成功し始めたのは，ヨーロッパで福音主義復活の動きが生じた後の19世紀だった。ヨーロッパの宣教師が東アフリカに来た当初の理由は，キリスト教を広め，奴隷貿易を廃止しアフリカの人々を救うことだった。加えて，当時東アフリカで急速に広まりつつあったイスラム教の布教を食い止めることも意図されていた[8]。

1800年代にジャーナリスト，冒険家であったヘンリー・モートン・スタンリー（Henry Morton Stanley）が，ウガンダで勢力を拡大しつつあったブガンダ王国の王であるムテサを訪問した。ムテサはブガンダに進出しようとしているエジプトの脅威に対抗するためにイギリスのような力を持つ国と友好関係を持ちたいと考え，スタンリーに宣教師らを招待する手紙を書かせた[9]。そして，1877年に，イギリス国教会の宣教会の一つである教会伝道協会（Church Missionary Society：CMS）に所属する宣教師の団体がブガンダに初めて到着した。その後1879年に，フランス系のローマ・カトリックの宗教団体であるホワイト・ファーザーズ（White Fathers）が到着した。こうして，ブガンダでは19世紀にイスラム教が普及し始めたことに次いで，キリスト教も受け入れることとなった[10]。

ブガンダ王国でキリスト教が普及するに至るまでには，雑用係を含む多くのキリスト教徒が処刑されたムワンガ（ムテサの次の王）による迫害（1885-1887年）や宗教戦争（1888-1892年）などがあった。宗教戦争では，1888年からイスラム教徒とキリスト教徒が対立，その後イギリスの統治軍が加わり，カトリックとプロテスタントの対立が起こった[11]。この対立後，マサカ地域など西方地域がカトリックに割り当てられることとなった。プロテスタントが政治的優位にたったが，カトリックは農民など恵まれない地位にある人びとに働きかけ，西部で信仰を広めた[12]。

ブガンダ王国でキリスト教が急速に拡大した理由の１つに，ヨーロッパの宣教師が，教会の指導者であると同時に，教育者でもあったことがある。このことから，ブガンダの人々は，改宗することで，レンガ造りの家やいす，ベッドなどを作るための白人の人々が持っている知識を得ることができると考えた。また，キリスト教徒にのみ教育が与えられたため，西洋の教育を受けるためにはキリスト教に改宗するしかなかった[13]。

宣教師は，資金の大部分を学校に費やした。彼らはキリスト教を若い人々に教える場として学校を利用した。キリスト教にとって，本や聖書を読むことは非常に重要で，そのために読み書き能力は必須のものだった。1890年代に初等学校が設立され始め[14]，最初のミッション系の中等学校は，ナミリャンゴ・カレッジ（Namilyango College）で，イギリス系のカトリック宗教団体であるミルヒル・ファーザーズ（Mill Hill Fathers）によって1902年に設立された。最初の生徒は，カトリック教徒の首長（コミュニティのリーダー）の息子たちであった。彼らは読み書き計算の３R's を学び，そのほかにも地理や音楽，英語，遊びについて学んだ[15]。同じ年に，メンゴ・ハイスクール（Mengo High School）が教会伝道協会によって設立され，1905年に，寄宿制のガヤザ・ハイスクール（Gayaza High School）がプロテスタントの首長の娘のために設立された。その後1913年に初等学校であるナリーニャ・ルワンターレ女子校（Nalinya Lwantale Girls' School）が設立された。これらの学校はそれぞれ違う宗教団体によって設立され，共通のシラバスなどはなかった。1900年代にウガンダにおけるキリスト教徒の数が増加し西洋の教育への需要が高まったこと，1907年から少額ではあるが政府からの補助金が交付されるようになったこともあってか[16]，ミッション系の学校に通う生徒は1904年時点で12,570人であったのが，1921年には152,421人へと増加した[17]。

(2) 保護領政府の学校教育への介入の始まりから独立まで[18]

1924年にウガンダの教育を調査し，教育政策の立案や改革について勧告を行うことを目的としていたフェルプス・ストークス委員会は，ウガンダの東部と南部の植民地を視察し，ウガンダの教育は宣教師と彼らに協力する首長のみによって管理されていることを指摘した[19]。当委員会は，政府と宗教団体が協力し，政府は資金援助すべきと勧告した。その結果，保護領政府はウガンダの学校教育に関与することが義務であると認識し，1925年に教育省が設立された[20]。1926年の初めまでに，授業は規定のシラバスに従って行われるようになった。

その後1927年に教育省から教育令（The Education Ordinance）が出され，この教育令の規定によって学校教育制度全体が政府の指示と統制のもとに置かれることとなった。教育令により，政府は学校の所有者が学校でできることを指示・決定できる権限を得て，教員の登録・育成を担うようになった。必要な水準を満たしていない学校を閉鎖し，定められた試験に合格した教員を登録し，不正行為を繰り返した教員を登録から削除する権限が教育長に与えられた。地域ごとに行政官を委員長とした委員会が設置され，学校は監督されるようになった[21]。

宣教師ら宗教団体は，この教育令に関して，罰則規定については不満を持っていたが，学校の建設，資金調達，人員配置，教員の訓練という膨大な任務に対する支援になるという点では歓迎の意を示した[22]。この教育令により学校教育制度に関するかなりの権限が政府に与えられたが，学校の所有と管理は依然として宣教師ら宗教団体の手に委ねられていた。そのため，保護領政府は，初等・中等教育における役割を宗教団体への補助金，教員研修，全体的な監督にとどめており，1962年にウガンダが独立するまで，役割を可能な限り制限していた[23]。宣教師が提供してきた学問重視の教育か，実践重視の教育かをめぐる議会での話し合いにおいて，宗教団体関係者と政府関係者の意見対立がみられたことから[24]，政府が学校教育に介入し始めてはいたが，この頃は依然として宗教団体関係者の影響力は大きかったと考えられる。

(3) 独立後の教育政策―学校教育の担い手が宣教師から政府へ―

ウガンダは1962年10月９日にイギリスから独立を果たした。この独立を受けて，新しい国家が必要とする人材を育成する手段として，政府の教育への関心が高まった。独立前に発表されたウガンダの最初の５か年開発計画（1961-66年）では，独立前の準備に重点が置かれており，労働力の需要を満たすために保護領政府が考案した学校教育制度を引き継ぎ，中等教育の量的拡大が重視された[25]。

このような教育への熱意が高まる中，1963年１月にウガンダの教育と教育システムを調査し，国のニーズを満たしどのように改善できるか提唱することを目的に[26]，イギリスのハル大学（University of Hull）の教授であったエドガー・ブラッドショー・キャッスル（Edgar Bradshaw Castle）を議長としたキャッスル委員会が任命された[27]。この委員会のメンバーに宗教団体関係者はいなかった。当委員会は，政府の職員や教員という高度な人材の育成を優先するために，中等教育への入学者数を増やすことに重点を置いた[28]。このキャッスル委員会の報告書を受け，教育令が改定され教育法（The Education Act）となり，国全体の教育計画および開発のすべてにおいて，政府は統制力を発揮できるようになった。

それまで初等教育修了後の教育機関，中等学校，教員養成学校，職業学校，そして都市部のごく少数の初

等学校を除いたほとんどの初等学校が宗教関連の有志団体によって各宗派の考えに基づいて運営，管理されていた[29]。宗教団体は，学校に対してかなりの統制力を持ち，特に誰を入学させ，誰が教え，誰が校長になるかを決定する権限を持っていた[30]。しかし，このキャッスル委員会の報告書が出されたのち，子どもたちは人種や宗教に関係なく，どの学校にも入学することができるようになり，学校に入学するために改宗しなければならないというようなことはなくなった。その結果，多くの男子生徒と女子生徒が中等教育の機会を得ることができるようになった。宗教団体からは，校舎の所有権を主張し，抵抗運動も行われたが，平和的に解決され，こうして1964年には国内のすべての初等学校と中等学校が政府の管理下に置かれるようになった。

しかし，すべての教育機関が政府の管理下に置かれたものの，すぐに教育が量的に拡大したかというとそうではなかった。1970年代，経済の後退によりウガンダは困難な時代に突入した[31]。第２次５か年開発計画（1966-1971年）が策定され，続いて第３次５か年開発計画（1971-1976年）も策定されたが，イディ・アミン（Idi Amin）によるクーデターによって打ち砕かれた。教育への期待が高まっていた中であったが，その後もウガンダは政治的混乱やタンザニアとの戦争により，政治的にも軍事的にも不安定な時期となっていってしまう。

そのような中，諸外国の力に頼らず自立すべきだという意識が高まり，1977年，ウガンダの状況の変化を反映した新しい包括的な政策を策定するために，最初の教育政策検討委員会（The Educational Policy Review Commission：EPRC）が設立された[32]。この委員会のメンバーにも，校長の１人がカトリックの修道女であったことを除いて宗教団体関係者は選ばれていない。EPRC の報告書を反映した，10か年開発計画（1981-1990年）が1981年に発表されたこの時期[33]，中等教育が急速に拡大した。カナダからの外部支援と世界銀行からの第３次国際開発協会（International Development Association: IDA）教育ローンは，中等教育の定員増加に貢献したとされている[34]。また，当時の学校運営に関しては，政府は教育の重要性を認識していたものの，経済的・政治的困難から教育分野に対して十分な予算を獲得することが難しく，政府からの十分な支援がない中，保護者やコミュニティがどの程度，個々の学校に支援を提供できるかに大きく左右されていたとされている。

この頃の政治情勢としては，政治混乱の中，５回の政権交代を経て[35]，1986年に現政権である，国民抵抗運動（National Resistance Movement: NRM）が新政権を樹立した。[36]この政権のもとふたたび教育に力がそそがれるようになり，初等教育普及政策（Universal Primary Education: UPE）や中等教育普及政策（Universal Post Primary Education and Training: UPPET）が導入されることとなった。

ここまでみてきたように，ウガンダの学校教育は宣教師の布教活動によってもたらされ，1925年まで学校教育は宗教団体の手に完全に委ねられていた。1925年フェルプス・ストークス委員会の報告書により，ウガンダの学校教育に介入することは政府の義務であるとされ，財政支援を行うことが必要であるとされた。しかし政府が介入してすぐ，学校の管理，運営を政府が担うようになったかというとそうではなかった。この時，ウガンダの学校教育に対する責任は政府にあったが，政府の役割は主に財政支援などにとどまっており，運営，管理は宗教団体に任せられていた。しかし，1962年にイギリスから独立し，キャッスル委員会の報告書を受け，政府は国全体の教育開発に力を入れるため統制を強め，すべての教育機関が政府の管理下に置かれることとなった。当委員会から，教育に関する委員会に宗教団体関係者が選ばれなくなっていったことからも，政府が完全に学校教育を管理するようになったと言えるだろう。

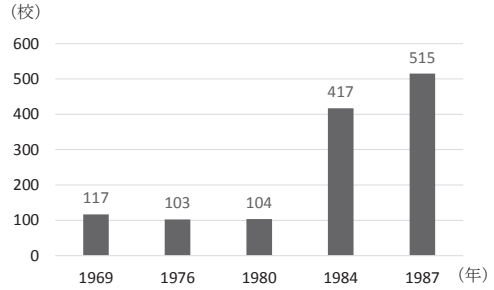
表１　ウガンダの宣教師の活動と学校教育の発展

年代	主な出来事
1800-	ヨーロッパの宣教師が初めて東アフリカに到着，ヘンリー・モートン・スタンリーがブガンダの国王ムテサ訪問
1877	教会伝道協会がブガンダに到着
1879	ホワイト・ファーザーズが到着
1902	最初のミッション系の中等学校であるナミリャンゴ・カレッジが設立
1924	フェルプス・ストークス委員会が視察
1925	教育省設立
1927	教育令制定（学校教育制度に関する権限が政府に与えられる）
1962	イギリスから独立
1963	キャッスル委員会設置，教育令が改定され教育法となる（すべての学校が政府の管理下に置かれる）
1970-	クーデターや戦争により不安定な状況になる
1977	教育政策検討委員会設置
1981	10か年開発計画策定

出典：Davis R. Evans (1994); J.C.Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) を参考に筆者作成。

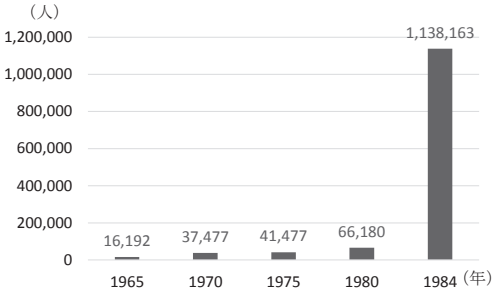
しかし，独立後制度が整えられてからも，中等教育拡大までの道のりは遠かった。ウガンダは独立直後，経済的困難，政治的混乱が続き，それらが収束し始めた1980年代に中等教育が急速に拡大した。次の図１と図２は，中等学校の学校数と生徒数の変化を表したものである。

図１　中等学校の学校数の変化



出典：Babigumira (1989) 176頁，Heyneman (1983) 404頁を参考に筆者作成。

図２　中等学校の生徒数の変化



出典：Odeat (1990) ９頁を参考に筆者作成。

中等学校の学校数は，1969年に117校であったが，1984年には417校となった[37]。学校数のみならず，中等学校レベル（O レベルの S1から S4）の入学者数が1965年では16,192人であったのに対し，1984年には1,138,163人へと急激に増加した[38]。就学率に関しては1970年で3.87% であったのが，1984年に8.53% まで上昇した[39]。では，この急激な中等教育の拡大の裏には何があったのだろうか。

制度史の側面からみると，学校の管理者が宗教団体から政府へと移り，その後経済的困難や政治的混乱に直面するもそれらが収束後，学校数，入学者数ともに急激に増加した。このことから，学校の管理者が政府に移ったことが拡大の要因になったと考えられる。Evans（1994）らの先行研究では，カナダや世界銀行などの外部支援により学校が設立され，コミュニティが学校の運営を支援したとされているが，それ以外に小論が取り上げた事例では地域の宗教団体およびコミュニティが学校を設立し，運営を支援していた。そこで，実際の学校の設立過程をみていくことで制度史というマクロな視点からはみえてこなかった別の側面がみえてくるのではないかと考えた。実際の設立過程をみるため，小論では，中等教育が急激に拡大した1980年代に設立されたカサンダ県のミッション系の学校である A 中等学校に着目した。次節では，A 中等学校の記念誌やインタビューをもとに実際の設立過程をみていく。

２．中等教育拡大期（1980年代）における中等学校の設立過程

(1) A 中等学校の設立過程

A 中等学校があるカサンダ県は，ウガンダの首都であるカンパラから北西へ約100km 離れた場所に位置し，この学校はカサンダ県の中でもチガンダという地域に属する。このチガンダ地域ではキリスト教（とりわけカトリック）が深く信仰されている。確かにチガンダ地域には伝統的宗教があったとされるが，外部や外国の宗教の影響から逃れ，伝統的宗教を存続させていく力をもった指導者が不足していたため，キリスト教（カトリック）に対抗することが難しかったと考えられる[40]。この理由からこの地域では，外部の宗教であるキリスト教（カトリック）が普及しやすく，少なくとも1900年代からキリスト教（カトリック）が深く根差していたのではないかと考えられる。現在 A 中等学校は，公立で，S1から S6までの６学年の生徒が在籍している。男子寮女子寮完備の共学校であり，寮生と近くの地域から通ってくる通学生がいる。全校生徒数約720名で，教員数は33名である。

A 中等学校では，設立25周年を記念した冊子が作成されており，その中に記載されていた学校史や学校設立費用出資者へのインタビュー（B さん，C さん），追加で行ったインタビュー（D さん）をもとに，当学校の設立過程をみていく。B さんは学校設立のアイデアを提案した神父で，C さんは当学校の最初の会計士である。この冊子は，2010年６月26日に設立25周年を記念して作成されたものであり，全34頁，内容構成は表２に示す通りである。

表２　A 中等学校の25周年記念誌の内容

頁数	内容
1	目次，編集委員会より
2	チインダ・ミティアナ教区の司教からのメッセージ
3	政府関係者からのメッセージ
4	地域の国会議員からのメッセージ
5	PTA 会長からのメッセージ
6	教会からのメッセージ
7	コミュニティからのメッセージ
8	現校長からのメッセージ
9	当学校に向けてお祝いメッセージ
10-11	設立費用出資者へのインタビュー（B さん）
12-15	学校史
16	副校長と長年勤務している教員へのインタビュー
17	教務主任への質問
18	当学校の名前の由来となった殉教者について
19-23	写真
24	卒業した生徒会長からのメッセージ，生徒指導担当からのメッセージ，出資者であり，最初の会計士へのインタビュー（C さん）
25-33	生徒の作品（詩など）
34	2010年6月26日に行われたミサのプログラム

出典：A 中等学校設立25周年記念誌をもとに筆者作成。

冊子の情報を補完し，詳しい当時の生活状況や宗教に関して尋ねるため，筆者は1987年から教員として当学校に勤務していた D さんにインタビューを行った。インタビューは2023年３月11日の午後に約１時間程度，D さんが経営する初等学校にて行った。

当学校は，1985年１月21日に設立された。学校設立のアイデアは，学校付近のローマ・カトリック教会で新しく神父となった B さんから出された。B さんは，インタビュー記事において「この地域に１つも中等学校がなく，初等教育修了後遠くの中等学校へ子どもたちを通わせることは難しかった。そのため中等学校設立は重要事項だと認識しました。」と語っている。D さんに行った追加のインタビューにおいても，隣の県であるミティアナ県やムベンデ県には当時公立の中等学校が設立されたが，この地域には中等学校は１つもなかったと語られた。B さんは，手を貸してくれる何人かのキリスト教徒に声をかけ，委員会を立ち上げた。その後，この地域の司教のところへ学校設立のアイデアを伝えに行き，賛同を得て学校設立へ向けて本格的に動き始め，無事に A 中等学校が設立された。

そして同校は，ローマ・カトリック教会によって設立された私立の学校として，1985年１月に最初の学期が始まった。最初の生徒数はその地域に住んでいる23人で，教員数は２人だった。C さんのインタビューによると，はじめは学校の土地として，修道女が所有していた土地を教区会が提供し，その後地域の司教らが訪れ，現在の土地が提供された。設立当初，学校として校舎をもっていなかったため，1988年までその地域の教会の講堂を教室として使っていた。

最初の PTA 会長を務めたのは，神父であり，学校のための資金を集めたり，教員を探したりと尽力した。カンパラから来た建築士や，その他の教会関係者，コミュニティの助けもあり，２つの教室，事務室，小さな売店が新たに増設された。この施設は現在も使用されている。その後，生徒数の増加に伴い，新たに２つの教室と理科室が増設され，職員宿舎も学校の近くに造られた。地域の行政官からの寄付や他の神父からの援助などによって，さらに学校設備は整えられた。

1989年４月26日に，学校は政府によって引き継がれ，教育省が教員の人事や学校の物品の提供に関して責任をもつようになった。歴代の校長や教員のリストをみると，最初の頃は，神父や修道女が校長や学校の管理者として学校に関わっていたことがわかる。その後，教員数，生徒数ともに増加し，新たに職員宿舎が増設され，女子寮や教員と生徒のためのトイレ，講堂も建設された。2002年には，A レベル（高校レベル）である S5が設置され，７人の生徒が入学した。

(2) A 中等学校設立に至るまでの困難とキリスト教徒の貢献

A 中等学校の設立に至るまでの道のりは決して簡単なものではなかった。とりわけ資金面で苦労していた。C さんは，インタビューにおいて，資金を集めることへの苦労を以下のように語っている。「時間を無駄にしていると村の人に笑われたが，辛抱強く耐え抜きました。資金集めは簡単ではありませんでした」。彼女と彼女の夫は資金集めのために，村々を渡り歩いた。その結果，コミュニティメンバーが牛を寄付してくれることもあったようである[41]。

B さんは，教員を雇用し，十分な給与を支払うこと，学校に必要な備品を購入することが当時大きな問題であったことを語った。

D さんもまた，学校設立においてもっとも難しかったのは資金集めだと言った。当時の地域の人々は，学校設立というアイデアに賛成はしたものの，経済的理由から実際に自分の子どもを通わせるということに対してはあまり意欲的でなく，教育への関心も今ほど高

くなかった[42]。そのような中，彼も前述したＣさんのように，家々を１件ずつ回り子どもたちを学校に通わせるよう，保護者を説得した。

Ｃさんと Ｃさんの夫の貢献は，資金面だけにとどまらず，設立資金の募金活動に加えて，最初の教室の拡大や教員用トイレ設置のために10,000個ものレンガを提供し，校舎設立のための木材も提供した。彼女の夫は，それらをすべて彼の大型トラックで運び，井戸から水をくみ上げるための設備も無償で整えた。彼女の夫は教育を愛し，彼の資金を使って最初の教員らの住居を借り，それを維持することにも努めた。努力は無駄だったかというインタビュワーからＣさんへの問いに対し，彼女は，「いいえ！私たち家族の夢は叶いました。得られたものは大きかったと思います。夫はコミュニティが教育を受けるためにたくさんの苦労をしました。ですが，現在は私たちのほぼすべての子どもや孫たちがこのＡ中等学校に通っています，このことが時間の無駄でしょうか。」と答えている。

Ｂさんはインタビューで，無償で学校の設備整備にかかるお金を出してくれた人や，無償でレンガを提供してくれた人々への感謝の思いを語っている。

Ｃさんはキリスト教徒であり[43]，追加のインタビューにおいてこの牛の提供者や他の貢献者について尋ねたところ，学校設立に関わった人たちはすべてカトリック教徒であったことがわかった。学校史やインタビューより，土地の確保や校舎の建設，人材の確保など学校設立の裏には，多くのキリスト教関係者（当学校の場合カトリック）が関わっており，彼らの熱心な働きかけがあったことがわかる。

表３　寄付品と寄付者一覧

寄付品	寄付者	寄付者が信仰していた宗教
１頭の牛	コミュニティメンバー	カトリック
10,000個のレンガ	Ｃさんの夫	カトリック
木材	Ｃさんの夫	カトリック
100枚の鉄板	地域の行政官	不明
資金提供（設備費用）	Ｃさんの夫 ＰＴＡ会長	カトリック カトリック

出典：25周年学校記念誌とインタビューをもとに筆者作成。

(3) 現在まで続く教会やキリスト教と学校の強固な関係性

なぜ見返りを求めずに学校設立に尽力できたのかという筆者の問いかけに対し，Ｄさんはこう答えた。「たとえ子どもがいなかったとしても，私たちは貢献するでしょう。なぜなら，彼らにとってこの学校は彼らの学校だからです。それ（学校設立に関わっているの）が彼らの信仰する宗教であるなら，話し合いに参加し，きちんと席に座らなければいけないのと同じように，彼らは貢献すべきです。」と。当時この地域では，現在と同じように大多数がキリスト教（カトリック）を信仰していた。教会が学校を建てるということは，地域のカトリック教徒にとって，その学校が自分たちの学校であることを指した。この深い信仰心が，キリスト教と学校を強く結びつけ，この地域には１校も中等学校がなかったため，地域の人々にとって非常に新しいものであった中等学校設立というアイデアが受け入れられることを可能にした。さらに，人々は経済的に苦しくても学校に貢献しようとした。この信仰心が今日まで学校を支え続けてきたのではないだろうか。

今日Ａ中等学校では，毎日夕方に讃美歌を歌い，毎週水曜日と日曜日に開かれるミサに向けて，前日に歌の練習を行う。Ａ中等学校設立にかかわった近くの教会の行事があれば，生徒たちはその行事で披露する讃美歌の練習を夜７時から時には夜11時まで行う。また，１学期に一度，学校に神父が来て，キリスト教の教えを振り返る黙想（Recollection）のために，生徒と教員それぞれに話をする。学校の設立，校舎建設に尽力した人々の名前は，ハウスと呼ばれる班（縦割り班）の呼称となっており，全校生徒誰もが知る名前となっている。生徒たちは，それぞれの班の名前が入ったＴシャツを着ている。ここに，学校設立への感謝の意が込められているのではないかと思う。それを裏付けるように，当学校の校歌の歌詞には，教会が学校を設立してくれたことへの感謝を示す箇所がある。深い信仰心と，教会やキリスト教と学校の親密な関係性は，直接的，時に間接的にこのような学校設立への感謝に支えられ，変わらず現在まで続いている。

おわりに

実際の学校設立の歴史をひもとくと，ウガンダの制度史というマクロな視点からはみえてこなかった側面がみえてくる。ウガンダの歴史において，学校教育と宗教は両輪の関係である。制度史をみていくと，ウガンダの学校教育は宗教団体の手から次第に政府の管理下に渡っていったことがわかる。独立後，教育普及という目標のもと，政府はこれまで宗教と一体の関係にあった学校教育から制度上，宗教を切り離した。こうした制度史の視座からみると，政府介入後中等教育が拡大したかに思えるが，本論で論じたように実際の学

校設立，教育機会拡大には政府の介入後も，宗教に従事している者，そしてコミュニティの力が大きかった。

彼らは，政府からの資金援助がない中で，教育の重要性を訴え，時に自らの資産や労力を投じながらも学校設立に奔走した。そして，地域にキリスト教が深く浸透していたからこそ，神父であったＢさんから提案された中等学校設立という彼らにとって新しいアイデアは受け入れられた。その深い信仰心と，教会やキリスト教と学校の結びつきは現在も変わることなく，それらに支えられ今日まで学校は存続できた。

当学校は，今年で設立38年になり，設立当初と比較すると教員数も生徒数も大幅に拡大した。加えて，キリスト教の神父や司教等のおかげで，この学校にはウガンダの他の中等学校にはないことも多い，図書室や２つの理科室が完備されている。この設備のおかげで，生徒たちは実験をすることができ，本に触れることができる。彼らの果たした役割は，この地域の子どもたち，そしてこの地域の未来の子どもたちにとっても大きいものであることは間違いないだろう。

現在まで続く学校の設立に大きく関与したのは，宣教師の布教活動によって広まったキリスト教の信者だった。このときの宣教師の布教活動によってもたらされたキリスト教の考えや信念は，宗教布教という彼ら本位の目的があったにせよ，ウガンダに学校教育をもたらしたことに加えて，その後のウガンダの教育機会拡大へ貢献したのではないだろうか。

本論は，１校の設立過程のみの検討ではあったが，実際の学校の歴史に着目することで，制度史というマクロな視点からはみえてこない，実際の学校設立過程や携わった人々の思いなどを明らかにした。ウガンダのさらなる教育の発展を考えるうえで，実際の教育現場を支えた人々の実態を明らかにすることは非常に大きな意味があると考える。また，今回の事例では見受けられなかったが，学校が設立され，地域に普及していく中で，非キリスト教徒または非カトリック教徒との葛藤が生じていなかったか，この葛藤に着目することは公教育機関としての学校と宗教の関係を明らかにすることにつながると思われるため，今後の課題としたい。今後は，他の地域の中等学校や初等学校の設立過程についても調査し，ミクロな視点とマクロな視点双方からウガンダにおける学校教育と宗教との関連について検討を重ねていきたい。

【注】

[1] 宣教師らがアフリカに到着する前に，全く教育が行われていなかったかというとそうではない。確かに公教育は行われていなかったが，村というコミュニティの中で年長者や親から口承伝達で，踊りや歌やスポーツなどの文化や慣習，信念や価値が教えられていた。ウガンダでは，自分たちのクラン（氏族）やトーテム，そして彼らのクランにおける禁忌などが教えられていた（Dziri Khadidja (2014). Western Education in Uganda (1878-1939), Dissertation）。

[2] Davis R. Evans (1994). *Education Policy Formation in Africa A Comparative Study of Five Countries*, An ARTS Publication; J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971). *Development and Administration of Education in Uganda*, Fountain Publishers, p.2.

[3] Dziri Khadidja (2014) 前掲論文。

[4] Holly Elisabeth Hanson (2010). Indigenous Adaptation: Uganda's Village Schools, ca. 1880-1937, *Comparative Education Review*, vol. 54, No.2.

[5] Assiimwe Venansio (2010). *THE WITNESS CELEBRATING 25 Years*, No.1.

[6] Grace Atuhaire Kamutumba (2010). *HISTORY OF EAST AFRICA (SINCE 1000AD to INDEPENDENCE)*, JOIBASO PUBLISHERS, p.138.

[7] 同上。

[8] 同書，135頁。

[9] Donald Leeming & Irene Mwaka & Asaph Kigozi (2010). *NEW History of East Africa*, Longman, p.140.; Viera Pawliková-Vilhanová (2006) BIBLICAL TRANSLATIONS OF EARLY MISSIONARIES IN EAST AND CENTRAL AFRICA: TRANSLATIONS INTO LUGANDA, *ASIAN AND AFRICAN STUDIES*, **15**, 2, pp.198-199.

[10] Grace Atuhaire Kamutumba (2010) 前掲書，139頁；Donald Leeming & Irene Mwaka & Asaph Kigozi (2010) 前掲書，140頁。

[11] Donald Leeming & Irene Mwaka & Asaph Kigozi (2010) 前掲書，175頁。; KIGANDA JOSE MARIE(1998). THE SURVIVAL OF GANDA TRADITIONAL RELIGION BEFORE AND AFTER THE COMING OF FOREIGN RELIGIONS, TANGAZA COLLAGE, p.26.

[12] Zablon Nthamburi (1991). From Mission to Church: A Handbook of Christianity in East Africa, Uzima Press.

[13] Grace Atuhaire Kamutumba (2010) 前掲書，143-144頁。

[14] Dziri Khadidja (2014) 前掲論文。

[15] J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，2頁；Grace Atuhaire Kamutumba (2010) 前掲書，

145頁 ; Donald Leeming & Irene Mwaka & Asaph Kigozi (2010) 前掲書，250頁。

[16] Dziri Khadidja (2014) 前掲論文。

[17] これは，教会伝道協会とホワイト・ファーザーズ，ミルヒル・ファーザーズ，ヴェローナ・ファーザーズ（Verona Fathers）（イタリアの司祭ダニエル・コンボニ（Daniele Comboni）によって設立されたカトリック宗教団体）の４つの宗教団体が管理する学校の生徒数を合算したものである。（Donald Leeming & Irene Mwaka & Asaph Kigozi (2010) 前掲書，250-251頁）。

[18] 宣教師らの訪問を発端に，イギリス政府はウガンダの領有権を得ようとし，1894年８月27日にブガンダ国の保護領化を宣言し，ウガンダはイギリスの支配下に置かれることとなった（吉田昌夫・白石壮一郎編，『ウガンダを知るための53章』，2014年，明石書店，57頁）。

[19] フェルプス・ストークス委員会は，ニューヨークのフェルプス・ストークス基金によって任命，資金提供され，英国領アフリカの多くの地域の教育の評価を任された委員会であった（Davis R. Evans (1994) 前掲書，127頁）。

[20] 同上；J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，3頁。

[21] J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，5頁。

[22] しかし，最初は政府による宣教師ら宗教布教団体に対する補助金は非常に少なく，1921年に急激に増加し，そこから次第に増加していった。

[23] J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，5頁。

[24] J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，6-7頁。

[25] Davis R. Evans (1994) 前掲書，132頁。

[26] J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，16頁。

[27] 委員会のメンバーには，ウガンダの教育事情に詳しい教育機関から９人のウガンダ人が選ばれ，イギリスなどの諸外国から８人が選ばれた（Davis R. Evans (1994) 前掲書，130頁）。

[28] Davis R. Evans (1994) 前掲書，131頁。

[29] ここでいう宗教関連の有志団体とは，カトリックの宣教師ら，プロテスタントの宣教師ら，ウガンダ・イスラム教育協会を指す。政府によって設立された宗派を超えた中等学校や初等学校もあったが，その数は少なかった。ほかに，アジア人任意団体が運営する学校や私立学校も存在した（Cooper F. Odaet (1990). Implementing Educational Policies in Uganda, *World Bank Discussion Papers Africa Technical Development Series*, p.1）。

[30] J.C. Ssekamwa, S.M.E. & Lugumba (1971) 前掲書，17頁。

[31] 1970年代初頭から1980-81年の間に GDP は年率2.6％で減少したが，人口は年率2.0％で増加し，その結果１人当たりの GDP で測った生活水準は年率5.4％で低下した（Cooper F. Odaet (1990) 前掲書，5頁）。

[32] この委員会のメンバーは主に政府機関や教育機関の代表者であり，初めてウガンダ人が委員長を務めた（Davis R. Evans (1994) 前掲書，136頁）。

[33] Davis R. Evans (1994) 前掲書，140頁。

[34] 同書，140-141頁。

[35] 1979年にルレ政権，ビナイサ政権，ムワンガ政権と短命な政権が続き，1980年第２次オボテ政権が誕生した。1985年，オケロの短い治世を経て，現大統領であるムセベニ率いる NRM が政権を握った。

[36] 同書，141頁。

[37] Daniel M. Babigumira (1989). The Impact of Oppressive Military-Political Governments on School Effectiveness in Uganda, 1971 to 1986, Dissertation, p.176. Stephen P. Heyneman (1983). Education during a Period of Austerity: Uganda, 1971-1981, *Comparative Education Review, Oct.*, Vol. 27, No. 3, p.404.

[38] Cooper F. Odaet (1990) 前掲書，9頁。

[39] UNESCO Institute for Statistics (UIS). UIS.Stat Bulk Data Download Service. apiportal.uis.unesco.org/bdd，最終閲覧日2023年８月14日。

[40] チガンダ地域の伝統的宗教は完全に衰退したわけではなく，現在でもかなり少数ではあるが残っているようである（Grace Atuhaire Kamutumba (2010) 前掲書，143頁）。

[41] ウガンダでは，牛は結婚の際に花婿側から花嫁側へと送られ，そこで何頭送られるかで裕福さがはかられるほど，財産の対象としてみなされる。

[42] 当時の保護者が主に従事していた職業は農業であり，商業に従事している者は少なく，学費を払うことのできる保護者も少なかった（R さんのインタビューより）。

[43] インタビュー記事に彼女がキリスト教徒であったことは明記されていないが，インタビューの最後にコミュニティメンバーからの資金に感謝し，神の力を信じ，変化は必ずやってくるという希望をもつように呼び掛ける言葉があることからもキリスト教徒であることがわかる。

（主指導教員　牧貴愛）